

エリシャと預言者のともがら

2007. 5. 22 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

列王記・第二 2章1節から18節

主がエリヤをたつまきに乗せて天に上げられるとき、エリヤはエリシャを連れてギルガルから出て行った。エリヤはエリシャに、「ここにとどまっていなさい。主が私をベテルに遣わされたから。」と言ったが、エリシャは言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません。」こうして、彼らはベテルに下って行った。すると、ベテルの預言者のともがらがエリシャのところに出て来て、彼に言った。「きょう、主があなたの主人をあなたから取り上げられることを知っていますか。」エリシャは、「私も知っているが、黙っていてください。」と答えた。それからエリヤは彼に、「エリシャ。ここにとどまっていなさい。主が私をエリコに遣わされたから。」と言った。しかし、彼は言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません。」こうして、彼らはエリコに来た。エリコの預言者のともがらがエリシャに近づいて来て、彼に言った。「きょう、主があなたの主人をあなたから取り上げられることを知っていますか。」エリシャは、「私も知っているが、黙っていてください。」と答えた。エリヤは彼に、「ここにとどまっていなさい。主が私をヨルダンへ遣わされたから。」と言った。しかし、彼は言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません。」こうして、ふたりは進んで行った。預言者のともがらのうち五十人が行って、遠く離れて立っていた。ふたりがヨルダン川のほとりに立ったとき、エリヤは自分の外套を取り、それを丸めて水を打った。すると、水は両側に分かれた。それでふたりはかわいた土の上を渡った。渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「私はあなたのために何をしようか。私があるところから取り去られる前に、求めなさい。」すると、エリシャは、「では、あなたの霊の、二つの分け前が私のものになりますように。」と言った。エリヤは言った。「あなたはむずかしい注文をする。しかし、もし、私があるところから取り去られるとき、あなたが私を見ることができれば、そのことがあなたにかなえられよう。できないなら、そうはならない。」こうして、彼らがなお進みながら話していると、なんと、一台の火の戦車と火の馬とが現われ、このふたりの間を分け隔て、エリヤは、たつまきに乗って天へ上って行った。エリシャはこれを見て、「わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち。」と叫んでいたが、彼はもう見えなかった。そこで、彼は自分の着物をつかみ、それを二つに引き裂いた。それから、彼はエリヤの身から落ちた外套を拾い上げ、引き返してヨルダン川の岸边に立った。彼はエリヤの身から落ちた外套を取って水を打ち、「エリヤの神、主は、どこにおられるのですか。」と言い、彼が再び水を打つと、水が両側に分かれたので、エリシャは渡った。エリコの預言者のともがらは、遠くから彼を見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている。」と言い、彼を迎えに行

って、地に伏して彼に礼をした。彼らはエリシャに言った。「しもべたちのところに五十人の力ある者がいます。どうか彼らをあなたのご主人を捜しに行かせてください。主の霊が彼を運んで、どこかの山か谷に彼を投げられたのかもしれませんが。」するとエリシャは、「人をやってはいけません。」と言った。しかし、彼らがしつこく彼に願ったので、ついにエリシャは、「やりなさい。」と言った。それで、彼らは五十人を遣わした。彼らは、三日間、捜したが、彼を見つけることはできなかった。彼らはエリシャがエリコにとどまっているところへ帰って来た。エリシャは彼らに言った。「行かないようにと、あなたがたに言ったではありませんか。」

コリント人への手紙・第一 3章1節から4節

さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するように話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるではありませんか。ある人が、「私はパウロにつく。」と言え、別の人は、「私はアポロに。」と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。

ガラテヤ人への手紙 4章19節

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。

エペソ人への手紙 4章13節

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

へブル人への手紙 5章11節から14節

この方について、私たちは話すべきことをたくさん持っていますが、あなたがたの耳が鈍くなっているため、説き明かすことが困難です。あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。

先週、ちょっと言ったのです。「今日は眠っていてもいいですよ（笑）」と。眠っていた人もいるかもしれませんが、眠っていなかった人もいたらしいのです。（笑） なぜなら、

集会在終わったあとで、ある姉妹から電話があったのです。「初めに読まれた箇所と、後のメッセージとはいったいどういう関係なのですか」と。

初めの箇所とは、アナニヤとサツピラについての箇所でした。彼らはイエス様を信じ救われました。イエス様のために生きたいと思ったにもかかわらず、ある時から誤った方向に行ってしまいました。偽善的な態度を取ったのです。理由ははっきり分かりません。金銭のことだったかもしれません。そうすると、主は集会（初代教会全体）を祝福することがおできにならなくなってしまいました。ですから、先週の題名は、『主のからだなる教会』としました。

また、「どうしてアナニヤとサツピラの箇所を読んだのか」とは、もし集会の中で一人でも妬みを持ったり、批判したりするならば、主は働くことがおできにならなくなります。非常に恐ろしいことです。

サウロはクリスチャンたちを迫害したとき、「キリストはもう生きていない。キリストと関係ない。キリストに対する思いを消せばそれでいいだろう」と思ったのです。けれど、イエス様は彼に出会われたのです。「わたしは、あなたが迫害しているイエスです」と。彼はイエス様を迫害する気持ちはありませんでしたが、イエス様に属する人たちとイエス様とは切り離すことは出来ません。イエス様がかしらであり、イエス様を信じる者は、そのからだの肢体です。そういう関係です。

初めに読んでいただきました箇所について、今日話す内容はいったいどういうものかと思われるかもしれません。題名は、『エリシャと預言者のともがら』です。

もちろん昔の話です。二千六百年前の話ですが、エリヤという立派な預言者がエリシャに次のように言いました。「あなたので欲しいことを求めなさい。何をして欲しいのですか」と。「生けるまことの神」も、これと全く同じことを、私たちに呼びかけておいでになります。「あなたので欲しいことを求めなさい。与えます」。主は与えたくてしかたがないのです。

では私たちの願いは、どういうもののでしょうか。イエス様をご自分の栄光を現わされることとなっているのでしょうか。

二つのことがはっきりしています。

まず、イエス様は今日もなお、私たちの心の中に働いておられるということです。

次に、私たちがひたすら聖霊に拠り頼もうと願うまでになれば、お喜びになるでしょう。なぜなら、それは主イエス様ご自身が語りかけたかと思っておられ、御霊が支配しておられる結果だからです。私たちが確かな期待をもって、イエス様を仰ぎ見ることができるからです。「あなたので欲しいことを求めなさい」と。

主のご臨在のうちにある私たちの願いとは、いったいどういうものなのでしょうか。私たちの願いが当時のサムエルのように、「しもべは聞きます。主よ。お話しください」であれば、本当に祝福されます。

- ・当時の「預言者のともがら」とは、いったい誰のことを言っているのでしょうか。
- ・彼らの仕事は、いったい何だったのでしょうか。

・なぜ当時、預言者の学校があったのでしょうか。

これらの疑問を解くためには、サムエルの時代にさかのぼってみなければなりません。サムエルという男は、最初の預言者でした。サムエル以前には、いわゆる「祭司」だけがありました。預言者はいなかったのです。

祭司の役目は、いったい何だったのでしょうか。

罪人が主なる神に近づく道は、いけにえをささげることでした。主なる神ご自身がこの道を教えてくださったのですが、祭司だけが、そのいけにえを主の前に運ぶことができたのです。ですから祭司の役目は、いけにえの動物を殺し、その罪のない身代わりの動物の血を、主の御前に運ぶことでした。祭司は、いけにえをささげ、イスラエルの民に主のみこころを、つまり「主に近づく道」を教えたのです。

そして、大祭司であるアロンおよびその他の祭司は、忠実にその役目を果たしましたが、時を経るにしたがい堕落していきました。それは、祭司の不誠実、不忠実により、主の欲し給わないところのものになってしまったのです。

ですから、主の導きにより預言者たちが現われました。その最初の預言者はサムエルです。このサムエルが、預言者の学校を開きました。「預言者のともがら」とは、その学校の生徒でした。この預言者の学校は、預言者の準備のための学校でした。

前に話しましたように、祭司たちはいけにえをささげることにより、イスラエルの民に主のみこころを示したのです。イスラエルの民も、祭司たちがいけにえをささげることにより、主のみこころを認めたのです。

その「主なる神のみこころ」とは、罪人は主に近づくことができません。そこで、主はその「逃れ道」を備えられたのです。即ち、「罪のないいけにえの血の価値を信じれば、主に近づくことができる」ということです。そしてそれをイスラエルの民は認めたのです。

けれど、士師記の時代になると、祭司もまた堕落して、民も霊的な理解力を失ってしまったのです。サムエルが幼かったとき、そのときの祭司にエリという人がいました。この祭司の肉体は、当時のイスラエルの民の霊的状态を表わしていました。それは、この祭司の両眼がほとんど見えなかったからです。この祭司は、自分の家族の道德生活を律することができないほど弱くなっていました。

この祭司エリの息子たちについて、二、三箇所読んでみましょう。第一サムエル記2章。まず12節を読みます。

サムエル記・第一 2章12節

さて、エリの息子たちは、よこしまな者で、主を知らず、…

とあります。

17節

このように、子たちの罪は、主の前で非常に大きかった。主へのささげ物を、この人たちが侮ったからである。

22節

エリは非常に年をとっていた。彼は自分の息子たちがイスラエル全体に行なっていることの一部始終、それに彼らが会見の天幕の入口で仕えている女たちと寝ているということを聞いた。

25節後半

彼らは父の言うことを聞こうとしなかった。

もちろん、主のみことばも聞こうとしなかったのです。霊的理解力があまりにも欠乏したので、道徳的墮落がやってきたのです。

当時、霊的理解力と霊的判断力が非常に衰えていましたので、違った教え方が必要だったのです。つまり口で教えなければならなくなりました。ですから預言者の役目は、いけにえをもって、民に主のみこころを教えるばかりでなく、口で民に教えることが、預言者の役目でした。主なる神のみこころを、直接民に語るために預言者の学校が開かれました。

この預言者の学校で、預言者は次の三つのことを学ばなければならなかったのです。

第一に、彼らは、おのれの民の霊的歴史を学ばなければなりません。

もし私たちが、イザヤ書、エレミヤ書、ヨナ書、ハガイ書、ダニエル書などの預言を読めば、そこに「霊的歴史」があることを発見します。例えば、ダニエルはエレミヤの預言を学んだ、とあります。

第二番目。預言者の学校では、愛国心も養成しました。

主なる神が、イスラエルの民を選び、特別な者として聖別なさり、あらゆる国民の中の証し人となさいました。ですから、預言者たちはイスラエルの民が主のみこころを行なうようと、非常な熱意をもって説きました。イスラエルの民は主に選び分かれた者でしたから、預言者たちはイスラエルの民に対して非常に熱心だったのです。

第三番目。最も大切なことは、「啓示」により、上からの光により、主のみこころを悟り、知ることでした。

このように、霊的歴史を見ること。また、愛国心を持つことは大切です。しかし、最も大切なことは、この主のみこころを「啓示によって知る」ことです。学問は、大切であり必要ですが、一番大切なものではありません。ガラテヤ書1章を読めば分かります。学者であるパウロは、次のように証したのです。

ガラテヤ人への手紙 1章11節、12節

兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

預言者たちは、「主のみこころ、主の願い、主の考え」を宣べ伝えただけではなく、主のみこころを自分の生活のうちに実行しました。私たちはどうでしょうか。

- ・私たちは自分の生活のうちに、主のみこころが証しされているでしょうか。
- ・私たちの生活が、主の願いを満たしているでしょうか。
- ・私たちの生活で、私たちは主のお考えを実行しているでしょうか。

預言者たちは、主のみこころを伝える者であったばかりではなく、主のお考えを実行する者でもありました。預言者の学校はそのための準備の場所でした。このような学校は、エリシャの時代にたくさんありました。預言者のともがらは、準備中でした。従ってまだ成熟していませんでした。

エリシャの生活は、何を意味していたのでしょうか。

- ・エリシャの生活は、「よみがえりの力」を表わしていたのです。
- ・エリシャの生活は、「死に打ち勝った生活」でした。
- ・エリシャの生活の土台は、「ヨルダン川」でした。即ち「十字架」が彼の生活の源でした。

預言者という役目が絶対に必要であることを、預言者のともがらはエリシャの生活から学び取りました。預言者のともがらは、何を経験しなければならなかったのでしょうか。彼らは三つの事がらを経験すべきだったのです。

もう一度、第二列王記に戻りましょう。

列王記・第二 2章3節

すると、ベテルの預言者のともがらがエリシャのところに出て来て、彼に言った。

「きょう、主があなたの主人をあなたから取り上げられることを知っていますか。」

エリシャは、「私も知っているが、黙っていてください。」と答えた。

預言者のともがらは、エリシャは預言者の学校へ行っておらず、ただエリヤに師事しただけなので、預言者と認めず、このような質問を發したのです。彼らは、エリシャよりも自分を高い者のように思いました。靈的傲慢とうぬぼれが、彼らの心を支配していました。預言者のともがらは、素人であるエリシャに対し、尊敬の念を持っていませんでした。彼らは、自分たちこそ主から奉仕の召しを受けた者であり、自分たちこそ主に仕える者だとうぬぼれていました。エリシャは一度も預言者の学校に行ったこともなく、また神学校を卒業もしなかったのです。ただエリヤの行くところ、エリシャはいつも従って行きました。ですから彼らは、エリシャのことを、エリヤのしもべにすぎないと見下していたのです。

もし、私たちが「召し」をいただければ、それは特別な自分の手柄ではありません。ですから、それを誇りとするなら、それは靈的な未熟を表わしているにすぎません。

預言者の学校では多くの知識を学ぶかもしれませんが、しかし、靈的に傲慢であったならば、本当にわざわざです。「自分はほかの人と同じ仕事をやらなくてよい」。「普通の仕事はやらなくてよいから、勝（まさ）っているのだ」と思うならば、本当にわざわざです。

私たちは次のように祈るべきではないでしょうか。即ち、「主よ。どうか、私を霊的な傲慢とうぬぼれから解放してください」と。

霊的な成熟とは、「自我を意識して否定すること」であり、「主イエス様にあってすべてを持っている」ことです。傲慢は人を盲目にします。心おごる者は、主がほかの兄弟姉妹に働いておいでになることが見えません。「自分」だけを考えます。

預言者のともがらは、主がエリシャの中に働いておいでになることを見ることができなかつたのです。けれども、この第二列王記の2章15節、16節を読むと、預言者のともがらは、後になって内面的に成長したことが分かります。

列王記・第二 2章15節、16節

エリコの預言者のともがらは、遠くから彼を見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている。」と言い、彼を迎えに行つて、地に伏して彼に礼をした。彼らはエリシャに言った。「しもべたちのところに五十人の力ある者がいます。どうか彼らをあなたのご主人を捜しに行かせてください。主の霊が彼を運んで、どこかの山か谷に彼を投げられたのかもしれませんが。」するとエリシャは、「人をやってはいけません。」と言つた。

結局、預言者のともがらはエリヤの霊がエリシャの上にとどまっていると認めたのです。預言者のともがらは、勉強や知識が決定的なものではなく、「よみがえりのいのちの力を持っているかどうか」が問題であることを知つたのです。

私たちが学び、奉仕をしていくと、ある一つの点に到達します。それは、私たちがよみがえられたイエス様の徹底的なご支配のもとに、「よみがえりの力」をもって奉仕しなければならぬということを知るようになります。

今までは良い目的をもって行なつてきたことが、それは人間の力で行なつてきたのだ、これから後は聖霊の力をもってしなければいけない、と思うようになります。

預言者のともがらは、エリシャのうちによみがえりの力があつたことを認めました。それを疑いませんでした。けれど彼ら自身は、自分のうちにそのよみがえりの力を持っていませんでした。

私たちは、聖書の一つの真理を知識として信じます。それを疑いませんが、その事実が自分のものとなるには、数年を要することがあるかもしれません。

例えば、イエス様が私たちの古き人とともに十字架につけられたことを理解しているかもしれません。疑いもなくこの事実を信じます。けれど突然困難が襲つて来て、そのとき古き人がまだ死んでいないことを発見します。そしてあなたは失望し、望みが絶えてしまいます。「聖書の教えは良いけれど、実行するには難しい。駄目だ」と言うようになります。

なぜあなたの両親、或いは主人、或いは子どもは、あなたに反対するのでしょうか。なぜ病気になつてしまったのでしょうか。なぜ自分が自分の強い意志のために悩むのでしょうか。自分が得た真理が実体験になるために、主がそのように導かれたのです。

けれど、主のみこころを知らず、絶望して「もう駄目だ」と多くの人たちは言います。「聖書の教えは確かに良いけれど、自分の生活に当てはまらない。当てはめることができない」と言います。これこそ、悪魔の働きであり、悪魔のささやきです。主は、あなたが聖書の真理を悟るために、あなたに挑戦なさったり、またほかの人の無理解の中にあなたを置かれたのです。

預言者のともがらは、エリヤの霊がエリシャの上にとどまっているのを見ました。けれど、それを自分の経験としていませんでした。16節を読むと分かります。エリヤが実際に昇天したかどうかを知らなかったのです。

もしエリヤが昇天しなかったとしたら、エリシャはエリヤの霊を受けなかったことでしょう。ところが預言者のともがらは、その目に見える証拠が欲しかったのです。私たちもしばしば感覚によって何か証拠を欲しがります。預言者のともがらは、何かを見たり、感じたりして証拠を欲しがりました。

しかし、「よみがえりの力」のしるしは、私たちの感覚の外にあります。私たちの感覚では、よみがえりの力が認められない場合がしばしばあるのではないのでしょうか。

「よみがえりの力」で生活している人は、「霊的ないのち」で満ち溢れていると、意識して生活しているのでしょうか。パウロは時々、自分が死人のように力無い者のように感じましたが、それでもなお仕事を続ける力をもっていました。

「よみがえりの力」で生活している人は、自分の弱さ、自分の虚ろさ、また自分が委ねていることを意識しています。よみがえりの力をもっている兄弟姉妹が、「自分は働きたくない」、また「自分の生活からよみがえりのいのちが溢れるほどになるまで自分は何もしない」と考えているならば、その人は決して進歩しません。

預言者のともがらは証拠を求めましたが、それは肉的なことでした。肉はいつも証拠を求めます。けれど霊に導かれている人は、目に見える証拠なしに辛抱し、主のよみがえりの力を自分のものとしします。

私たちはこの地上の生活をしている間、

- ・「イエス様が私たちのいのち」であるから、不可能にも屈せず前進しようとしているでしょうか。
- ・感情や知識の証拠を求めようとする誘惑にさらされてはいないでしょうか。

パウロが今日、私たちのところに訪れたとしましょう。(もしそれが実際のことだったら本当にいいのですけれど、) おそらく私たちはみな、「この男が新約聖書の書簡を書いた男か」、「この男が全世界を揺り動かした男か」、と驚くのではないかと思います。

そのときパウロに、次のように尋ねてみましょう。「パウロよ。あなたが多くの手紙を書き、長い旅をし、朝から晩まで働いているとき、あなたはいつもイエス様のよみがえりの力を感じていましたか。あなたは頭が痛くなかったのでしょうか。あなたは疲れたことまた落胆したことがなかったのですか。あなたは泣いたこと、不安に思ったことがありま

せんでしたか」と。

パウロはそれに対して何と答えるでしょう。「私のように内面的な戦いを持っており、外面的な不安を持っていた者は珍しいと思います。私は、失望、落胆を経験し、試みられ、暗やみを歩くということはどんなことかを知り、また、生きる望みさえ失ってしまう混乱と心の憂いに涙も流しました」と答えることでしょう。

パウロは、よみがえりのいのちの力を感ぜませんでした、「主イエス様のよみがえりの力」で生きていました。

私たちが感じることと実際は、しばしば全く反対のことがあります。私たちは熱くもなく冷たくもないと感じるかもしれませんが、それにも関わらず、私たちは自分の力によってではなく、イエス様のよみがえりの力を持っているので、前進することができるのです。

預言者のともがらは目に見える証拠を求めました。これは霊的な未熟を表わしています。預言者のともがらは、エリシャの経験したことを経験しなければならなかったのです。

エリシャは「ヨルダン川」を渡って行きました。彼のいのちの源は「十字架」でした。私たちは、生まれながらの考え方を十字架に釘付けにしなければいけません。さもなければ、イエス様のよみがえりの力を体験することはできません。

もう一つの例話は、第二列王記の4章に書かれています。前に話しましたように、エリシャは霊的な成熟を示し、これに対して預言者のともがらは霊的な未熟を表わしたのです。彼らは肉体的な考えによって支配されたのです。

この二番目の例を通して見ることができるのは、即ち、預言者のともがらは、「肉体的な考え」だけではなく、彼らは「肉体的な心」を持っていたのです。4章38節から読みます。
列王記・第二 4章38節から41節

エリシャがギルガルに帰って来たとき、この地にききんがあった。預言者のともがらが彼の前にすわっていたので、彼は若い者に命じた。「大きなかまを火にかけ、預言者のともがらのために、煮物を作りなさい。」彼らのひとりが食用の草を摘みに野に出て行くと、野生のつる草を見つけたので、そのつるから野生のうりを前掛けにいっぱい取って、帰って来た。そして、彼は煮物のかまの中にそれを切り込んだ。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。彼らはみなに食べさせようとして、これをよそった。みながその煮物を口にすると、叫んで言った。「神の人よ。かまの中に毒がはいっています。」彼らは食べることができなかった。エリシャは言った。「では、麦粉を持って来なさい。」彼はそれをかまに投げ入れて言った。「これをよそって、この人たちに食べさせなさい。」その時にはもう、かまの中には悪い物はなくなっていた。

預言者のともがらは、何を習わなければならなかったのでしょうか。彼らは、死よりも強い力を知らされようとしていました。また、彼らは未来の奉仕のために、この「よみがえりのいのちの力」が必要だったのです。

今読みました箇所を見ると、預言者のともがらがおのれのいのちを見て、それが役に立たないことを知り、どのようにして死を避けたかがよく分かります。

38節を読むと、預言者のともがらがエリシャの前に座していた、とあります。彼らは未来の準備を整えるために、エリシャから学んでいました。

福音書の中に書かれていますが、ベタニヤのマリヤも、イエス様の御前に座り、イエス様の話に耳を傾けました。これはエリシャに対する預言者のともがらの関係と同じでした。

主イエス様の御前に座り、耳を傾けることは、イエス様をご自身の栄光を現わされる道です。もしイエス様の御前に私たちが静かに座るならば、イエス様の栄光が現われるばかりでなく、私たちのあわれな様もあらわにされます。

ヤコブの井戸の、罪ある女の場合も同じでした。ここに現われたのは、イエス様の大きなご栄光ばかりでなく、彼女の大きな罪もあらわにされたのです。よく知られているヨハネ伝4章16節、次のように書かれています。

ヨハネの福音書 4章16節から18節

イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」女は答えて言った。「私には夫はありません。」イエスは言われた。「私には夫がないというのは、もっともです。あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。」

ここで、何という大きな罪があらわにされたのでしょうか。けれど、またいかに大きな主イエス様のご栄光が現われたことでしょうか。

預言者のともがらとエリシャの場合もこれと同じでした。当時、国に飢饉がありました。エリシャは、その地に飢饉があるのを知っており、自分のしもべに言ったのです。「大きなかまを火にかけ、預言者のともがらのために煮物を作りなさい」と。結局、上手くいかなかったのです。「死がかまの中にはいった」とあります。

預言者のともがらの間に、死がやってきました。どうしてでしょうか。良いものと悪いものの区別が分からず、何もかも持って来て、かまの中に入れたのです。

預言者のともがらは将来の奉仕の準備をしました。その中で最も大切なことは、「区別する」ことである、ということを知りました。

預言者たちはいつも困難と苦しみのうちに生活しました。主のみこころからイスラエルの民が離れたとき、預言者たちが出てきたのです。このようなときにおける預言者の使命は、死といのちを区別することでした。

野うり、或いは野生のうりは、本当のうりのように見えますが、その中には毒がありません。悪魔の目的は、至るところに「死」と「毒」をもたらすものです。こんにちも、「善と悪」、「死といのち」がしばしば一緒になっています。これは死の鍋を意味しているにほかなりません。こんにち、「霊的な区別」は絶対に必要です。

私たちの霊的ないのちには「何が必要であり」、また、「何がいけないか」、その区別を知らなければなりません。

私たちは人間や人間の言葉によらず、「主のみことば」によって生活しなければなりません。聖書に頼らない者は必ず損をします。

私たちは、イエス様なしに「イエス様のよみがえりの力」で生活することはできません。私たちが主から離れて行なうことすべては、新しいいのちにとって毒のようなものです。

したがって、エリシャはその鍋に粉を入れました。この粉は、結局イエス様の象徴です。もし、イエス様が死の中に入られるなら、死は逃げ去り、毒はもはや効かなくなります。

私たちが持っているのは、「死」と「毒」であり、イエス様が持っておいでになるのは、「救い」と「いのち」です。

もし、主イエス様が、私たちの心の中の虚しさと貧しさのうちにお入りになったなら、そこに「イエス様のよみがえりの力」が現われます。

了